

甲殻類その他

概要

「甲殻類その他」のレッドデータブックを作成するにあたっては、現在、福岡県内に生息している、あるいは生息の可能性がある甲殻類をはじめとする無脊椎動物を検討対象種とし（昆虫類、貝類、クモ形類等を除く）、分科会でリスト化して1次リストとした。1次リストには、主に水域（淡水・汽水・海水）に生息する737種がリストアップされた。次に、資料調査、聞き取り調査と分科会委員による現地調査によって情報を収集し、福岡県RDB2001が作成された平成13年以降の生息状況の変化を定性的に評価して、分科会会議での検討を踏まえて、カテゴリーを決定した。なお、和名、学名については、「原色検索日本海岸動物図鑑 I」（西村三郎編, 1992）, 「原色検索日本海岸動物図鑑 II」（西村三郎編, 1995）, 「Systema brachyurorum: Part I. An annotated checklist of extant brachyuran crabs of the world」（Ng et al., 2008）, 「干潟の絶滅危惧動物図鑑」（日本ベントス学会編, 2012）, および、その後出版された記載論文等に準じた。

2001年度版では希少種として、絶滅危惧：6種、準絶滅危惧：14種、情報不足：2種、絶滅のおそれのある地域個体群：1種の計23種をあげたが、福岡県RDB2014では、絶滅危惧IA類：5種、絶滅危惧IB類：7種、絶滅危惧II類：5種、準絶滅危惧：18種、情報不足：10種と、前回より22種多い45種を絶滅のおそれのある希少種として掲載した。内訳は、節足動物31種（うち甲殻類30種）、環形動物6種、その他8種（刺胞動物3種、扁形動物1種、腕足動物2種、星口動物1種、脊索動物1種）である。絶滅のおそれのある希少種が増加した理由は、福岡県RDB2001では対象種を「淡水産動物」とし、淡水から汽水に生息する無脊椎動物を対象としていたのに対し、今回は対象環境を海域まで広げたことが大きい。なお、今回のレッドデータブックの「甲殻類その他」で、希少種としてリストアップされたすべての種が、海域や河川感潮域（潮の干満の影響を受ける範囲）に生息する動物であった。これは、これらの環境が人間生活の影響を強く受けて悪化していることに加え、比較的調査研究が進み、多少なりとも生息情報があることの両方に起因すると思われる。

ただし、「甲殻類その他」で、生息状況がわかっている種はごくわずかで、絶滅に瀕している種は、今回掲載した種よりはるかに多いものと予想される。例えば、トゲイカリナマコウロコムシ *Arctonoella* sp., アリアケイトゴカイ *Parheteromastus* cf. *temuis*, ニッポンフサゴカイ *Thelepus* cf. *setosus*, ムツアシガニ *Hexapus sexpes*, ヨコナガモドキ *Asthenognathus inaequipes*, ミサキギボシムシ *Balanoglossus misakiensis* は、近隣の佐賀県・熊本県では絶滅が危惧されている種であるが、福岡県では確実な生息情報がなかったため、指定を見送った。今後、県内における詳細な調査が望まれる。

除外した種

新旧対照表（248ページ）に、前回と今回のカテゴリー毎の該当種の変化を示した。福岡県RDB2001では希少種とされ、今回はランク外になった種は、マミズクラゲ *Craspedacusta sowerbyi*, ホウネンエビ *Branchinella kugenumaensis*, トゲナシヌマエビ *Caridina typus*, ミナミテナガエビ *Macrobrachium formosense*, ヤドリカニダマシ *Polyonyx sinensis*, ムツハアリアケガニ *Camptandrium sexdentatum* の6種である。マミズクラゲとホウネンエビは、偶発的に大発生する種であるため、福岡県RDB2014では希少種としなかった。また、残りの4種は、近年、多産地が複数発見されたため、ランク外とした。なお、カテゴリー変更の理由については、各種の記述を参照されたい。

選定基準

長期間にわたっての定量的データがある種は、「甲殻類その他」では限られているため、2001年度版では定性的な判断により、各種のカテゴリーを決定した。福岡県RDB2014でも、定量的な判断を正確に

行うための十分な調査結果や資料・情報が不足していたため、多くの種では定性的な判断によりカテゴリーを決めざるを得なかった。ただし、定量的なデータがある種については、それを基に判断を行い、「選定理由」の欄に定量的な情報を記入した。今後、すべての種で定量的な判断を行うのが望ましいが、そのためには、長期にわたる継続した定量的研究の積み重ねが必要である。なお、資料調査、聞き取り調査については、信頼できる情報のみを用い、特にネット上の情報については、精査後に利用した。

ハビタット

絶滅危惧種を守るには、ある特定の種を保護するのではなく、彼らのハビタット（生息・生育地）をひとつの生態系として保全することが何よりも重要である。同時に、ハビタットを保全することで、甲殻類等だけでなく、多くの種を守ることができる。ハビタットの保全は、移動能力が低く、特定の地域に依存している甲殻類等で特に有効である。以下に、そのようなハビタットのうちで、特に重要で保全が必要な環境と地域を記す。このうち、小規模な干潟・潮下帯、河川感潮域、塩性湿地は、人間活動に脆弱であるため、特に注意が必要である。

(1) 干潟・潮下帯

長井浜・曾根干潟・和白干潟・多々良川河口・今津湾・加布里湾や有明海沿岸などに、比較的広大で良好な干潟・潮下帯が存在する。このうち、曾根干潟は、ハクセンシオマネキ、カブトガニなどの、加布里湾は、マキガイイソギンチャク、カブトガニなどの重要な生息地である。長井浜は、県下有数の砂質の干潟・潮下帯で、ウミサボテンなど砂底を好む動物が多産する。有明海沿岸には、広大で多様な干潟が広がっており、ミドリシャミセンガイ、ツバサゴカイ、ヒメムツアシガニ、ヒメアシハラガニ、トリウミアカイソモドキなどの泥底・砂泥底を好む動物が多産する。この他、小規模な干潟ではあるが、築上郡の上り松川には、シオマネキが高密度に生息するほか、ウモレベンケイガニやクシテガニなども生息する。三池港周辺の干潟・潮下帯には、トリウミアカイソモドキ、メナシピンノが多産するほか、オオシャミセンガイ、ツバサゴカイ、カブトガニ、ナメクジウオも確認されている。中でも、三池海水浴場は、ムギワラムシ、ヤドリカニダマシの多産地で重要である。

(2) 河川感潮域

有明海に流入する筑後川・矢部川などには、広大な河川干潟が発達するが、そこは、フタツトゲテッポウエビ、ヒメモクズガニ、アリアケガニ、ハラグクレチゴガニ、シオマネキなどの重要な生息地である。これらのカニ類は、海域の干潟にはほとんど生息しない。一方、豊前海に流入する城井川・佐井川や、筑前海に流入する紫川・西郷川・泉川などには良好な河川潮下帯があり、汽水域上流部を好むイトメ、タイワンヒライソモドキ、カワスナガニなどの重要な生息地となっている。

(3) 塩性湿地

塩性湿地（ヨシ、フクドなどの塩生植物群落と周辺の裸地・転石地）は、ウモレベンケイガニ、クシテガニ、ベンケイガニ、ハマガニ、アリアケガニなどの重要な生息地である。築上町上り松川、行橋市の祓川、今津湾、筑後川、沖端川、矢部川などに、甲殻類等の生息に適した良好な塩性湿地が存在する。これらの塩性湿地の多くは小規模であり、堤防工事・河川浚渫などの際に悪化・消失する危険性が高い。多くの人々が、塩性湿地の重要性を認識することが何よりも重要である。

危機の要因

「甲殻類その他」では、減少要因がはっきりしない種も少なくないが、福岡県RDB2014では、「河川開発」、「海岸開発」、「水質汚濁」、「産地局限」の4つが、「危機要因」として選ばれることが多かった。中でも、「河川開発」、「海岸開発」は、ハビタットの悪化だけでなく、消失をもたらすことが少なくない。また、ハビタットの分断・孤立化などによる「産地局限」は、繁殖個体の交流が難しくなるだけでなく、プランクトン幼生期を持つ種では、放出した幼生の大部分が無効分散になるなどの悪影響をもたらす（地域個体群ネットワークの崩壊）。以下、ハビタット毎に危機の要因を簡単に解説する。

(1) 砂質干潟

砂質干潟は、ウミサボテン、ニッポンオフエリア、テナガツノヤドカリ、ナメクジウオなどの生息地であり、堅い砂泥質の干潟とともに、生息環境の悪化が著しい場所である。原因は、底質の悪化（泥化や汚染）であると考えられる。泥化の原因は、ダム・砂防ダムの建設、河川や海域での砂利・砂の採取などである。一方、汚染の原因としては、生活排水や汚染物質の流入などが考えられる。

(2) 軟泥干潟

軟泥干潟は、アリアケカワゴカイ、アリアケヤワラガニ、ヒメムツアシガニ、ヒメヤマトオサガニなどの生息地として重要である。軟泥干潟は、潮流の弱い場所に形成されるため、底質の汚染などにより、貧酸素水塊や硫化物の影響を受けやすい環境である。また、特に海岸部の泥質干潟は、干拓や埋立によって消失する危険性が大きい。

(3) 河川感潮域

河川干潟と潮下帯は、イトメ、アリアケモドキ、カワスナガニなどの生息地として重要である。しかし、これらの場所では、水質・底質の悪化によって環境が悪化している場所が少なくない。また、河川改修や河川浚渫なども、このような場所に生息する種にとって、生存の脅威となっている。

(4) 塩性湿地

塩性湿地（周辺の裸地・転石地を含む）は、ウモレベンケイガニ、クシテガニ、アリアケガニ、シオマネキなどの生息地として重要であるが、その多くが、河川改修や河川浚渫などによって悪化・消失している。また、最近では、塩性湿地に浚渫土砂が捨てられることも多く、それが生息地破壊の直接の原因になっている。

この他、生息地ではないが、宿主特異性の高い種（寄生・共生種）にとって、宿主の減少は、生存に大きく影響する。カブトガニウズムシ（宿主は、カブトガニ）、ウチノミヤドリカニダマシとオオヨコナガピンノ（宿主は、両種ともツバサゴカイ）などでは、宿主の減少が、生存に対する直接の脅威になっている。一方、マキガイイソギンチャク（宿主は、アラムシロ）、アリアケヤワラガニとヒメムツアシガニ（宿主は、両種ともトゲイカリナマコ）のように、宿主は減少していないが、寄生共生種が減少している場合もある。

調査協力者（50音順）

及川 信，小林 哲，佐藤正典，三島伸治，嶺井久勝

参考文献

- 福岡県立北九州高等学校魚部. 2009. 北九州の干潟 BOOK 魚類甲殻類その他全 117 種. 67 pp. 北九州高等学校魚部, 北九州.
- Ng, P. K., D. Guinot, and P. J. F. Davie. 2008. Systema brachyurorum: Part I. An annotated checklist of extant brachyuran crabs of the world. *The Raffles Bulletin of Zoology* 17: 1-286.
- 日本ベントス学会（編） 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック. 285 pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 西村三郎編著. 1992. 原色検索日本海岸動物図鑑 I. 425 pp. 保育社, 大阪.
- 西村三郎編著. 1995. 原色検索日本海岸動物図鑑 II. 663 pp. 保育社, 大阪.

新旧対照表

	福岡県RDB2001の 카테고리				再選定 種数※	追加 種数※	掲載 種数※	
	絶滅危惧	準絶滅危惧	情報不足	地域個体群				
今回の カテゴリー	絶滅危惧IA類				0	5	5	
	絶滅危惧IB類	アリアケガニ オオヨコナガビノ カワスナガニ シオマネキ			4	3	7	
	絶滅危惧II類	アリアケモドキ	ウモレベンケイガニ ハクセンシオマネキ		3	2	5	
	準絶滅危惧	ベンケイガニ	クシテガニ ハマガニ ヒメアシハラガニ オサガニ メナシビノ	ヒメムツアシガニ	ハラグクレチゴガニ	8	10	18
	情報不足		タイワンヒライソモドキ ミナミアシハラガニ			2	8	10
		(合計)				17	28	45

	福岡県RDB2001の 카테고리				合計 種数
	絶滅危惧	準絶滅危惧	情報不足	地域個体群	
今回除外した種※		マミズクラゲ ホウネンエビ ミナミテナガエビ ヤドリカニダマシ ムツハアリアケガニ	トゲナシヌマエビ		6

		今回追加した種		
今回の カテゴリー	絶滅危惧IA類	カプトガニウズムシ オオシヤミセンガイ	カプトガニ フタツトゲテッポウエビ	ヒメモクスガニ
	絶滅危惧IB類	マキガイイソギンチャク	ウチノミヤドリカニダマシ	アリアケヤワラガニ
	絶滅危惧II類	ツバサゴカイ	ハシボソテッポウエビ	
	準絶滅危惧	ウミサボテン ハナワケイソギンチャク ミドリシヤミセンガイ アリアケカワゴカイ	ヒガタスナホリムシ テナガツノヤドカリ ヨモギホンヤドカリ	クボミテッポウエビ ヒメヤマトオサガニ ヒガシナメクジウオ
	情報不足	アンチラサメハダホシムシ イトメ ウチワゴカイ	ニッポンオフェリア シダレイトゴカイ フジテガニ	トリウミアカイソモドキ ギボシマメガニ

- ※ 再選定種数 … 福岡県RDB2001の選定種のうち、今回（福岡県RDB2014）でも再び選定した種の数。
 追加種数 … 福岡県RDB2001の選定種以外で、今回（福岡県RDB2014）において新たに選定した種の数。
 掲載種数 … 福岡県RDB2014に選定した種の数。（「再選定種数」と「追加種数」の合計）
 今回除外した種 … 福岡県RDB2001の選定種のうち、再評価の結果、今回（福岡県RDB2014）は選定しなかった種。

三岐腸目コガタウズムシ科	カプトガニウズムシ	絶滅危惧 IA 類
<i>Ectoplana limuli</i> (Ijima & Kaburaki, 1916)		2001：－，環境省：絶滅危惧I類
選定理由	宿主であるカプトガニ(絶滅危惧 IA 類)が激減。宿主特異性が強いいため、本種も激減しているのは確実である。	
危機要因	海岸開発，水質汚濁，その他(宿主であるカプトガニの減少)	
分布情報	加布里干潟(糸島市)，今津湾，曾根干潟など	
種の概要	カプトガニに外部寄生する海生三岐腸類の一種で，カプトガニにおける寄生率はほぼ 100%。伸長時の体長は約 8 mm，体幅は約 1 mm。卵殻は長径 1.2～1.7 mm の長楕円体状で短い柄があり，宿主の鰓葉に産みつけられることが多い。	
特記事項	東南アジア産のカプトガニ類の他の 2 種(ミナミカプトガニ <i>Tachypleus gigas</i> (Müller, 1785)，マルオカプトガニ <i>Carcinoscorpius rotundicaudus</i> (Latreille, 1802))からは，別種のウズムシ <i>E. undata</i> Sluys, 1983 の外部寄生が確認されている。	

舌殻目シャミセンガイ科	オオシャミセンガイ	絶滅危惧 IA 類
<i>Lingula adamsi</i> Dall, 1873		2001：－，環境省：－
選定理由	1927 年の柳川沖での採集が，国内初。その後，1980 年までに有明海奥部を中心に，湾中央部(熊本市河内町)，湾口部(熊本県上天草市松島町)など多くの採集記録があるが，近年の採集記録がほとんどない。	
危機要因	海岸開発，水質汚濁，産地局限などが考えられるが不明な点が多い。	
分布情報	近年の分布情報は，県内では柳川沖(1992 年)，三池沖(2005 年 6 月と 8 月)，県外では荒尾干潟(1989 年)のみ。長崎県諫早湾南岸神代の潮間帯に多産したが，現在は確認できない。	
種の概要	低潮帯や潮下帯の砂泥底に生息。殻を上，肉茎を下にして潜る。干潟上では，1 対の剛毛の束のある殻の前縁か，2～3 個の泥の小孔しか確認できないことが多い。殻長 70 mm。	
特記事項	1980 年以降の採集は，県内の記録を含め 3 地点 4 例のみ(上記)。	

剣尾目カプトガニ科	カプトガニ	絶滅危惧 IA 類
<i>Tachypleus tridentatus</i> (Leach, 1819)		2001：－，環境省：絶滅危惧I類
選定理由	以前は全国各地の海岸で普通にみられたが，近年は激減している。干潟に産卵に訪れるペアも曾根干潟を除けば，50 ペア未満である。曾根干潟では，一時的に増加し，2004，2005 年には 1000 ペアを越えたが，2007 年には 265 ペアに減少するなど安定した状態ではない。	
危機要因	海岸開発，水質汚濁，混獲，産地局限，その他(産卵に適した干潟上部の砂浜の減少)	
分布情報	曾根干潟，津屋崎沿岸，今津湾，加布里干潟(糸島市)，三池港など	
種の概要	半円形の前体と鋭い棘を多数備えた六角形の後体，尾剣の 3 部分からなる。6～8 月の大潮満潮時に砂浜の最満潮線付近で産卵。孵化した稚仔は隣接した泥質干潟に移動して成長するが，亜成体は干潟外の藻場など，成体は沖合で過ごすと考えられている。ゴカイ類などを捕食する。瀬戸内海の一部と九州北部に多かったが，現在は急激に減少し，特に瀬戸内海では危機的である。成長段階によって異なる環境を必要とするため，多様な環境をセットで保全する必要があるが，各地の個体群密度が激減している現状を考えると，繁殖地である砂浜の保全と復元が急務である。各地で稚仔の放流が行われているが，効果は検証されていない。体長 85 cm。	

十脚目テッポウエビ科	フタツゲテッポウエビ	絶滅危惧 IA 類
-------------------	-------------------	------------------

Alpheus hoplocheles Coutière, 1897

2001：－，環境省：－

選定理由	佐賀県太良町でも採集記録があるが、国内の確実な生息地は筑後川のみ。共生関係が示唆されている宿主のヒメモクスガニが絶滅の危機に瀕していることより、本種も絶滅の危険性が高いと考えられる。
危機要因	河川開発，水質汚濁，産地局限，その他（宿主の減少）
分布情報	筑後川
種の概要	干潟～浅海の泥底に生息し、ヒメモクスガニ（絶滅危惧 IA 類）と同一の巣穴から出現する。東アジア海域の固有種で、タイプ産地は日本、アモイならびにマレー群島である。日本産のタイプ標本はシーボルトコレクションで、ライデン博物館に収蔵されているが、詳細な産地は特定されていない。国内では採集例が極めて少なく、また、有明海湾奥部（佐賀県太良町、筑後川）が本種の唯一の産地と見なされる。甲長 15 mm。

十脚目モクスガニ科	ヒメモクスガニ	絶滅危惧 IA 類
------------------	----------------	------------------

Neoeriocheir leptognathus (Rathbun, 1913)

2001：－，環境省：－

選定理由	国内の確実な生息地は筑後川のみ。もともと希少であるのに加えて、巣穴に適した環境は、河川低潮帯の堅い泥地と限定される。そのため、河川の浚渫などによって絶滅する可能性がある。2001～2003 年までは筑後川で複数の個体が発見・採集されたが、2004 年以降は記録がない。
危機要因	河川開発，海岸開発，産地局限
分布情報	筑後川
種の概要	詳細不明。筑後川では低潮帯の堅い泥地に巣穴を掘って群居し、巣穴内にはフタツゲテッポウエビが共生していた。他のモクスガニ科の種のように両側回遊を行わないとされるが、長毛の密生する遊泳脚を持つことより、季節によってはかなり広い範囲を移動する可能性がある。甲幅 25 mm。
特記事項	剛毛の密生域が錨脚の内側面のみであることより、モクスガニ <i>Eriocheir japonica</i> と識別可能。有明海（塩塚川など）のみに分布する「大陸沿岸性遺存種」とされていたが、2001 年に筑後川河口で確認されるまでは正確な情報がなかった。中国黄海沿岸では市場に並ぶほど豊富に生息。

イソギンチャク目セトモノイソギンチャク科	マキガイイソギンチャク	絶滅危惧 IB 類
-----------------------------	--------------------	------------------

Paranthus sociatus Uchida, 1940

2001：－，環境省：－

選定理由	タイプ産地の熊本県苓北町富岡では、ほぼ絶滅。現在、生存が確認されているのは、県内では、糸島市加布里湾（泉川河口）、県外では、熊本市白川河口、熊本県上天草市松島・球磨川河口・羊角湾など（全国でも 10 地点未満）。中でも、泉川河口は本種の多産地として重要である。
危機要因	海岸開発，水質汚濁，産地局限，その他（宿主であるアラムシロ <i>Hima festiva</i> (Powys, 1835) やイボウミナ <i>Batillaria zonalis</i> (Bruguère, 1792) の減少)
分布情報	県内では、泉川河口の干潟でしか確認されていない。泉川のアラムシロにおける付着率は高く、季節や場所によっては 10% を越える。
種の概要	砂泥質干潟に生息するアラムシロやイボウミナ等の生きた巻貝の殻上に付着する。加布里湾では、主として中潮帯のアラムシロに付着し、他の巻貝上でみられることは稀。足盤径 10 mm。
特記事項	西表島船浦において、カキノテムシロ <i>Plicarcularia bellula</i> (A. Adams, 1852) やコブムシロ <i>P. globosa</i> (Quoy & Gaimard, 1833) の貝殻上から本種に類似した個体が得られているが、その分類学的検討は進んでいない。

十脚目カニダマン科	ウチノミヤドリカニダマン	絶滅危惧 IB 類
------------------	---------------------	------------------

Polyonyx utinomii Miyake, 1953

2001：－，環境省：－

選定理由	県内では、曾根干潟のみで記録されている。宿主のツバサゴカイは、他の干潟でも見つかっているため、生息地はもっと多いと考えられる。ツバサゴカイが減少傾向にあることから、生活史の一部を宿主に依存する本種は、宿主以上に危機的な状況にあると考えられる(有明海での宿主に対する共生率は10%未満)。
危機要因	海岸開発、水質汚濁、産地局限、その他(宿主の減少)
分布情報	曾根干潟
種の概要	砂質～砂泥質の中潮帯～潮下帯に生息する多毛類ツバサゴカイの棲管内に共生する。ひとつの棲管内から雌雄のペアが見出されることが多い。アンテナ状の顎脚を使って懸濁物を摂取する。甲幅 4 mm。

十脚目ヤワラガニ科	アリアケヤワラガニ	絶滅危惧 IB 類
------------------	------------------	------------------

Elamenopsis ariakensis (Sakai, 1969)

2001：－，環境省：情報不足

選定理由	有明海・八代海湾奥部の軟泥～泥質干潟に生息するトゲイカリナマコ <i>Protankyra bidentata</i> (Woodward & Barrett, 1858)の巣穴に共生する。トゲイカリナマコは少なくはないが、本種は希少で、特に県内の記録が少ない。湾奥部の干潟は底質の悪化が著しいため、注意を要する。
危機要因	海岸開発、水質汚濁
分布情報	筑後川、矢部川
種の概要	泥質～砂泥質の干潟に生息するトゲイカリナマコの巣穴に共生する(体表ではなく、巣穴の壁に定位)。宿主のトゲイカリナマコは、有明海・八代海に豊富に生息するが、アリアケヤワラガニは稀である。1962年に諫早湾(長崎県雲仙市)で採集された9個体を元に新種として記載されたが、その後、40年間は採集報告がなかった。最近になって、大阪湾(2個体)、有明海(6個体)、八代海(氷川で87個体)で発見された。国内の生息確認地点は10ヵ所以下。甲幅 5.5 mm。
特記事項	氷川(寄生率5.8%)を除けばトゲイカリナマコにおける本種の寄生率は0.1%未満と低く、寄生がみられない地域も多い。一腹産卵数も60卵程度と少なく、絶滅の可能性が高い種と考えられる。

十脚目アリアケガニ科	アリアケガニ	絶滅危惧 IB 類
-------------------	---------------	------------------

Cleistostoma dilatatum De Haan, 1833

2001：絶滅危惧，環境省：－

選定理由	かつて生息していた博多湾(多々良川など)や祓川(行橋市)では、ほぼ絶滅。有明海でも激減している。干潟上部の塩性湿地周辺に生息するため、河岸の埋立、護岸工事の影響を強く受けるほか、浚渫土砂の廃棄などによる生息地破壊でも減少。有明海では、シオマネキ、ヤマトオサガニ <i>Macrophthalmus japonicus</i> (De Haan, 1835)などとともに漁獲され、「がん漬」という塩辛の材料にされるため、乱獲も減少の一因と考えられる。
危機要因	河川開発、海岸開発、乱獲、産地局限、その他(浚渫土砂の廃棄)
分布情報	祓川(行橋市)、筑後川、沖端川、諏訪川(大牟田市)、矢部川など
種の概要	ヨシ原周辺やフクドなどの塩生植物群落の内部・周辺の泥地に巣穴を掘って生息。巣穴を覆うように先端の窄まった煙突状構造物を巣穴周辺の泥で作ることがある。歩脚の先端(指節)が赤いことで、近縁種と識別が可能。熊本市白川における繁殖期は6～10月で、9月がピーク。体の片側を持ち上げて振り降ろす、相撲のしこを踏むような waving を行う。有明海・八代海には少なくないが、それ以外の地域では希少で、生息地は孤立している。甲幅 24 mm。
特記事項	国内最大の生息地であった諫早湾の個体群は、干拓のため消滅。

十脚目カクレガニ科		オオヨコナガピンノ	絶滅危惧 IB 類
<i>Tritodynamia rathbunae</i> Shen, 1932		2001：絶滅危惧，環境省：－	
選定理由	分布域は比較的広いが、いずれの地域でも個体数は少ない。宿主であるツバサゴカイの生息に適した干潟が減少傾向にあり、生活史の一部をツバサゴカイに依存する本種も激減している。		
危機要因 分布情報	河川開発，海岸開発，産地局限 曾根干潟，矢部川など		
種の概要	砂泥底～砂底に生息する多毛類ツバサゴカイの棲管内に共生する。第3歩脚先端が非常に鋭く，ツバサゴカイの頑丈な棲管を切り裂いて侵入，脱出する。同属のオオギピンノ <i>Tritodynamia horvathi</i> と同様に，歩脚を用いて遊泳することがある。甲幅 20 mm。		
特記事項	甲幅 10 mm に満たない小型個体がツバサゴカイ類の棲管内から得られた例もある。		

十脚目ムツハアリアケガニ科		カワスナガニ	絶滅危惧 IB 類
<i>Deiratonotus japonicus</i> (Sakai, 1934)		2001：絶滅危惧，環境省：準絶滅危惧	
選定理由	清浄な河川河口域の汽水域上部の転石下に生息。河川改修による生息地攪乱や堰の設置による汽水域の消滅が，本種の生息を危うくする主要因と考えられる。県内の分布は局地的で，生息環境は脆弱であり，絶滅の可能性が高い。		
危機要因 分布情報	河川開発，海岸開発，水質汚濁，産地局限 県内では，城井川(築上町)，佐井川(豊前市)，紫川(北九州市)，西郷川(福津市)，桜井川・柳川・一貴山川・泉川(糸島市)などで記録がある。		
種の概要	日本固有種。分布域は広いが，生息する河川は，房総半島，伊豆半島，紀伊半島，山口県，四国南岸，九州沿岸，種子島，奄美大島，沖縄島の一部に限られている。また分布北限近くの房総半島や伊豆半島，分布南限の沖縄島の個体群は，いずれも小さく，絶滅の可能性が高い。他の沿岸性のカニ類に比べて，個体群間の遺伝的変異が顕著であり，個々の個体群を保全する意義が大きい。甲幅 11 mm。		
特記事項	トダカワスナガニ <i>Deiratonotus tondensis</i> Sakai, 1983 は本種の異名。		

十脚目スナガニ科		シオマネキ	絶滅危惧 IB 類
<i>Uca arcuata</i> (De Haan, 1835)		2001：絶滅危惧，環境省：絶滅危惧 II 類	
選定理由	博多湾(和白干潟・多々良川・今津湾)と玄界灘(津屋崎・花鶴川など)の個体群はほぼ絶滅。周防灘の個体群(曾根干潟・築上郡上り松川)も危機的な状態にある。個体数の多い有明海でも，河川護岸改修などにより減少している。有明海では，アリアケガニ，ヤマトオサガニなどとともに漁獲され，「がん漬」という塩辛の材料にされている。		
危機要因 分布情報	河川開発，海岸開発，その他(浚渫土砂廃棄) 上り松川(築上町)，曾根干潟，筑後川，沖端川，塩塚川(柳川市)，矢部川など		
種の概要	雄は，左右いずれかの鉗脚が巨大化。内湾や河口域の塩性湿地周辺の泥質干潟に深さ最大 50 cm の巣穴を掘って生息。大潮満潮線付近を分布の中心とする。甲幅 35 mm。		
特記事項	伊豆半島，紀伊半島，瀬戸内海，四国，九州，種子島，沖縄島から記録されるが，有明海・八代海を除けば個体数は少ない。		

ツバサゴカイ目ツバサゴカイ科	ツバサゴカイ	絶滅危惧Ⅱ類
-----------------------	---------------	---------------

Chaetopterus cautus Marenzeller, 1879

2001：－，環境省：－

選定理由	全国的に激減。県内でも、以前は目にすることが多かったが、近年は、ほとんど生息が確認できなくなっている。本種の生息には、安定した干潟環境、厚い堆積層、良好な水の交換を必要とするため、干潟の破壊・消失が本種の個体群の減少をもたらしている可能性が高い。
危機要因	海岸開発、水質汚濁、産地局限、その他(干潟の悪化)
分布情報	曾根干潟、沖端川河口、三池海水浴場など
種の概要	砂泥中に埋らし U 字状の棲管を造る。棲管中で水中の懸濁物を濾過している。干潟だけでなく、潮下帯(水深 20 m 以浅)からも見つかっている。棲管中には、しばしばオオヨコナガピンノヤラスバンマメガニ <i>Pinnix arathbuni</i> Sakai, 1934 などが共生している。虫体を刺激すると強く発光する。体長 25 cm。
特記事項	環境省の自然環境保全基礎調査(2002～2004)では、全国 19 ヲ所生息が確認されたが、このうち 12 ヲ所が九州沿岸に集中していた。

十脚目テッポウエビ科	ハシボンテッポウエビ	絶滅危惧Ⅱ類
-------------------	-------------------	---------------

Alpheus dolichodactylus Ortmann, 1890

2001：－，環境省：－

選定理由	ある程度の個体数が生息している地点は、有明海湾奥部に限られるが、近年は稀である。当海域では、河口域の軟泥干潟の多くは富栄養化による還元化が顕著であり、生息地としては不適になりつつある。
危機要因	海岸開発、水質汚濁、その他(底質の悪化)
分布情報	筑後川、沖端川、矢部川
種の概要	和歌山県(御坊市)、福岡県(上記)、佐賀県江北町(有明海)でのみ記録がある。汚染の少ない河口の軟泥干潟を好む。甲長 20 mm。
特記事項	日本固有種。東京湾をタイプ産地とするが、関東では原記載以後 100 年以上にわたって採集記録はなく、当該海域の個体群は消滅した可能性が高い。

十脚目ベンケイガニ科	ウモレベンケイガニ	絶滅危惧Ⅱ類
-------------------	------------------	---------------

Clistocoeloma sinense Shen, 1933

2001：準絶滅危惧，環境省：－

選定理由	広い分布域をもつが、記録される地域は限られ、また、どの産地でも個体数が少ない。オカミミガイと同じように、高いレベルの塩性湿地が維持されている地域にのみ分布する。護岸工事により破壊されやすい場所が生息地であるため、各地の個体群が絶滅の危機にある。
危機要因	河川開発、海岸開発、湿地開発、道路工事、水路改修、水質汚濁、産地局限
分布情報	上り松川(築上町)、曾根干潟、和白干潟、多々良川、沖端川など
種の概要	塩性湿地の高所にある転石などの下に埋在する。繁殖期は夏期。塩性湿地内にみられる他のベンケイガニ類とは違って動きは緩慢。甲幅 16 mm。
特記事項	分布北限の東京湾では、都市部に近い湾奥部を含め、広範囲での生息が知られているが、どこでも少ない。

十脚目アリアケガニ科	アリアケモドキ	絶滅危惧Ⅱ類
-------------------	----------------	---------------

Deiratonotus cristatus (De Man, 1895)

2001：絶滅危惧，環境省：－

選定理由	河川汽水域の泥質干潟や滞筋に生息。汽水域の中でも、特に淡水の影響が強い上流域が分布の中心のため、河口堰や護岸工事などによる生息地破壊を受けやすく、県内各地でも減少傾向にある。有明海でも県内では希少。和白干潟や多々良川でも記録があるが、現在は絶滅した可能性が高い。
危機要因	河川開発，海岸開発，乱獲，産地局限
分布情報	県内では、紫川(北九州市)，祓川(行橋市)，矢部川，諏訪川(大牟田市)などに生息するが多くはない。県外のポロ沼・能取湖(北海道)，鶴住居川(岩手県)，田古里川(佐賀県)，氷川(熊本県)では比較的多産。
種の概要	遺伝的には、本州太平洋沿岸の個体群，北海道・九州北西岸・瀬戸内海の個体群，奄美大島の個体群の3つに大きく分かれる。日本の南限となる沖縄島の個体群は、個体数が極少で、絶滅のおそれが強い。甲幅 19 mm。

十脚目スナガニ科	ハクセンシオマネキ	絶滅危惧Ⅱ類
-----------------	------------------	---------------

Uca lactea (De Haan, 1835)

2001：準絶滅危惧，環境省：絶滅危惧Ⅱ類

選定理由	県内では、曾根干潟を除けば個体数が少ない。特に和白干潟，今津湾，糸島市加布里などでは個体数が激減している(和白干潟と今津湾の個体数は 50%未満に減少，加布里ではほぼ絶滅)。埋立と底質の悪化(特に泥化)が個体数減少の原因と考えられる。
危機要因	河川開発，海岸開発，その他(底質の泥化)
分布情報	山国川，曾根干潟，津屋崎，和白干潟，今津湾，加布里干潟，筑後川，諏訪川(大牟田市)など
種の概要	雄は、左右いずれかが巨大化した鉗脚を激しく振る waving を行う。やや礫混じりの堅い砂泥質干潟高潮帯に深さ最大 20cm の巣穴を掘って生息する。甲幅 21 mm。
特記事項	琉球列島以南には、近縁のオキナワハクセンシオマネキ <i>Uca perplexa</i> (H. Milne Edwards, 1852)が分布。

ウミエラ目ウミサボテン科	ウミサボテン	準絶滅危惧
---------------------	---------------	--------------

Cavernularia obesa Milne-Edwards & Haime, 1850

2001：－，環境省：－

選定理由	県内では、行橋市長井浜でのみ記録があるが、大分県中津干潟でも確認されていることより、豊前海の広い範囲に分布している可能性が高い。国内における分布域は広いが、いずれも低密度である。本種が生息する砂質干潟では、生息環境が悪化している場所が少なくない。また、潮下帯ではナマコ漁の桁網などによって混獲されている場所もあるため、多くの場所で生存の危機にあると考えられる。群体の長さ 50 cm。
分布情報	長井浜(行橋市)

イソギンチャク目ウメボシイソギンチャク科	ハナフケイソギンチャク	準絶滅危惧
-----------------------------	--------------------	--------------

Neocondylactis sp.

2001：－，環境省：－

選定理由	おそらく有明海特産種で、有明海沿岸ではイソフケイソギンチャク <i>Gyrectis japonica</i> sensu Uchida & Soyama, 2003 と並んで食用とされているにもかかわらず、分類学的研究が進んでおらず未記載種。生息条件の悪化や乱獲により激減している。砂泥質干潟の潮間帯から潮下帯の底質に深く埋れ、底質上に触手を開く。体長 40 cm。
分布情報	有明海各地：矢部川，沖端川など

舌殻目シャミセンガイ科		ミドリシャミセンガイ	準絶滅危惧
<i>Lingula anatina</i> (Lamarck, 1801)		2001：－，環境省：－	
選定理由	干潟低潮帯や潮下帯の砂泥底または泥底に生息。青森県～奄美大島の広い範囲に分布するが、有明海(六角川・緑川)、八代海球磨川河口、奄美大島笠利湾を除けば希少。県内では柳川市大和町などに生息するが、高い漁獲圧や干潟の減少や水質・泥質の悪化により減少している。殻長 48 mm。		
分布情報	県内では、有明海(筑後川、沖端川、大和干拓地先(柳川市))や豊前海(曾根干潟など)で記録がある。		

サシバゴカイ目ゴカイ科		アリアケカワゴカイ	準絶滅危惧
<i>Hediste japonica</i> (Izuka, 1908)		2001：－，環境省：－	
選定理由	内湾奥部の河口周辺の軟泥干潟に穴居する。標本が残っていることより、日本に広く分布していた可能性があるが、近年の内湾奥部の埋立・干拓のため、有明海を除いて絶滅したと考えられる。湾奥部の軟泥干潟の埋立や環境悪化により減少。体長 20 cm。		
分布情報	筑後川、沖端川、大牟田川		

ワラジムシ目スナホリムシ科		ヒガタスナホリムシ	準絶滅危惧
<i>Eurydice akiyamai</i> Nunomura, 1981		2001：－，環境省：準絶滅危惧	
選定理由	全国的に広い分布域を持つが、生息地は限られており、福岡県からの確かな記録は1カ所のみである。これまで、十分な調査が行われておらず、生態に未知な部分が多いが、少しの環境の変化で個体数が減少する可能性が高い。各地の個体群が絶滅の危機にある。体長 7 mm。		
分布情報	和白干潟		

十脚目ヤドカリ科		テナガツノヤドカリ	準絶滅危惧
<i>Diogenes nitidimanus</i> Terao, 1913		2001：－，環境省：－	
選定理由	砂質干潟の潮間帯～潮下帯水深約 10 m に生息する。生息に適した砂質干潟は、全国的に見ても少ないが、埋立によって、近年さらに減少した。県内でも生息場所は限られ、かつ出現個体数は少ない。甲長 10 mm。		
分布情報	津屋崎、三苦海岸(福岡市)		

十脚目ホンヤドカリ科		ヨモギホンヤドカリ	準絶滅危惧
<i>Pagurus nigrofascia</i> Komai, 1996		2001：－，環境省：－	
選定理由	国内の生息確認は 10 地点以下。干潟に隣接する転石地の潮間帯や潮下帯に生息する。夏の約半年間を高潮帯の転石下で過ごすため、埋立や護岸整備など、人間活動の影響を受けやすい。生息地は極めて点在的で、海岸線の開発とともに減少しつつある。甲長 13 mm。		
分布情報	県内では、牧ノ鼻(福岡市東区)のみ。県外では、函館湾(北海道)、能登半島(石川県)、千葉港、和歌山市、大阪湾、大村湾(長崎県)、上天草市(熊本県)など。		

十脚目テッポウエビ科		クボミテッポウエビ	準絶滅危惧
<i>Stenolpheops anacanthus</i> Miya, 1997		2001：－，環境省：－	
選定理由	泥質干潟に生息するアナジャコ類やスナモグリ類の巣穴から記録されるが、希少。県内では、曾根干潟のみ。県外では、多摩川(東京都)、櫛田川(三重県)、日高川(和歌山県)、宮島(広島県)、青海島(山口県)、吉野川(徳島県)、浦の内湾(高知県)、天草松島・球磨川(熊本県)などで記録がある。甲長 7 mm。		
分布情報	県内では、曾根干潟のみ		

十脚目ムツアシガニ科		ヒメムツアシガニ	準絶滅危惧
		<i>Hexapus anfractus</i> (Rathbun, 1909)	2001：情報不足，環境省：－
選定理由	国内では有明海・八代海のみに分布し，泥質～砂泥質の干潟に生息するトゲイカリナマコやツバサゴカイ・フサゴカイ類の巣穴に共生する。有明海・八代海にトゲイカリナマコは少なくないが，本種は希少。埋立や水質悪化が生存に悪影響を及ぼしていると考えられる。甲幅 10 mm。		
分布情報	県内では，曽根干潟と沖端川で記録がある。県外では，田古里川・六角川(佐賀県)，塩屋海岸・緑川・天草松島・氷川(熊本県)。		

十脚目ベンケイガニ科		クシテガニ	準絶滅危惧
		<i>Parasesarma affine</i> (De Haan, 1837)	2001：準絶滅危惧，環境省：－
選定理由	東京湾～九州までの広い分布域をもつが，記録される地域も個体数もそれほど多くはない。生息地は，大きな内湾や大河川の河口域に限られる傾向がある。ヨシ原のやや上部付近を主な生息地とするため，護岸工事などによる影響を受けやすいと考えられる。甲幅 28 mm。		
分布情報	県内では，上り松川(築上町)，曽根干潟，筑後川，矢部川などに分布するが，有明海を除けば希少で絶滅が危惧される生息地も少なくない。		

十脚目ベンケイガニ科		ベンケイガニ	準絶滅危惧
		<i>Sesarmops intermedius</i> (De Haan, 1835)	2001：絶滅危惧，環境省：－
選定理由	コンクリート護岸化や河川改修によるヨシ原や土手・石垣の消滅，護岸による海への移動経路遮断などで個体数が減少。大河川のヨシ原には少なくないが，小河川や島の小個体群は危機的。県内でも，相島(新宮町)，多々良川，沖端川などでは，個体数が激減。甲幅 35 mm。		
分布情報	紫川，西川(遠賀川水系)，筑後川，沖端川，矢部川など		

十脚目モクズガニ科		ハマガニ	準絶滅危惧
		<i>Chasmagnathus convexus</i> (De Haan, 1833)	2001：準絶滅危惧，環境省：－
選定理由	ヨシ原や塩性湿地周辺に生息するため，河岸堤防の建設や改修，河岸埋立や河床浚渫が，本種の生存を危うくしている。有明海に流入する大河川では比較的豊富であるが，筑前海・豊前海では稀で，特に小河川では激減している。甲幅 50 mm。		
分布情報	曽根干潟，紫川，神田川(遠賀郡)，津屋崎，花鶴川(古賀市)，多々良川，今津湾，筑後川，矢部川など		

十脚目モクズガニ科		ヒメアシハラガニ	準絶滅危惧
		<i>Helicana japonica</i> K. Sakai & Yatsuzuka, 1980	2001：準絶滅危惧，環境省：－
選定理由	砂泥質の干潟に生息し，ハクセンシオマネキやチゴガニ <i>Ilyoplax pusilla</i> (De Haan, 1835)を捕食する。食物連鎖上位種であるため，元々個体数が多くない。特に，河川(花鶴川など)や小規模な干潟(和白干潟など)の個体群は，埋立や堤防の建設・改修や泥化によって減少傾向にある。甲幅 25 mm。		
分布情報	曽根干潟，津屋崎，花鶴川(古賀市)，和白干潟，多々良川，今津湾，筑後川，矢部川など		

十脚目コメツキガニ科		ハラグレチゴガニ	準絶滅危惧
		<i>Ilyoplax deschampsii</i> (Rathbun, 1913)	2001：地域個体群，環境省：準絶滅危惧
選定理由	河岸に発達する軟泥干潟の高潮帯～中潮帯に巣穴を掘って生息。海岸部ではほとんどみられない。国内では有明海北部にのみ分布。分布域周縁を除けば優占種で，絶滅の危険は小さい。ただし，堤防改修や河川浚渫などにより，生息地が破壊されることも少なくない。筑後川のような大河川では，河口から 20 km 上流の低塩分の水域でもみられる。甲幅 10 mm。		
分布情報	有明海各地(諫早湾～菊池川)		

十脚目オサガニ科		オサガニ	準絶滅危惧
		<i>Macrophthalmus abbreviatus</i> Manning & Holthuis, 1981	2001：準絶滅危惧，環境省：－
選定理由	県内の砂泥質干潟に広く分布するが、いずれの地域でも個体数が少なく、また、みられなくなった地域も多い。和白干潟(福岡市)などでは激減。全国的にも減少しているが、干潟の泥化と汚染が、主因と考えられる。甲幅 35 mm。		
分布情報	長井浜(行橋市)、曾根干潟では比較的豊富。他に、津屋崎(福津市)、室見川、加布里干潟(糸島市)、沖端川、矢部川など		

十脚目オサガニ科		ヒメヤマトオサガニ	準絶滅危惧
		<i>Macrophthalmus banzai</i> Wada & Sakai, 1989	2001：－，環境省：－
選定理由	外洋に近く暖流の影響を強く受ける軟泥質・泥質干潟に多い(河口内部や湾奥部には近縁のヤマトオサガニが分布)。生息地の埋立、土砂の堆積、還元化、浚渫などにより、生息地が破壊されることが多い。甲幅 23 mm。		
分布情報	県内では、境川・響灘(北九州市)でのみ記録がある。県外では、紀伊半島以南に分布し、南西諸島の泥質干潟では優占種である。		

十脚目メナシピンノ科		メナシピンノ	準絶滅危惧
		<i>Xenophthalmus pinnotheroides</i> White, 1846	2001：準絶滅危惧，環境省：－
選定理由	瀬戸内海西部～有明海の非常に限られた区域にのみ生息する。硬く締まった砂泥質の底質にのみ巣穴を作るため、埋立や浚渫、堤防設置により減少する可能性が高い。国内では、笠岡湾(岡山県)、諫早湾(長崎県)、三池海水浴場(大牟田市)に多産。体表にはウロコガイ上科の二枚貝ガンズキが共生することがある。甲幅 15 mm。		
分布情報	曾根干潟、洞海湾、沖端川、三池海水浴場など		

ナメクジウオ目ナメクジウオ科		ヒガシナメクジウオ	準絶滅危惧
		<i>Branchiostoma japonicum</i> (Willey, 1897)	2001：－，環境省：－
選定理由	干潟から水深約30mの粗砂底に生息。海砂の採取、埋立、海洋汚染などにより全国各地で減少している。20世紀前半には、有明海奥部の干潟(大牟田市沖合など)でも記録があるが、近年は、全く確認されていない。1895年に志賀島で採集された標本を元に記載された。体長 70 mm。		
分布情報	県内では、津屋崎、三池沖の潮下帯。県外では、ハチの干潟(広島県)、中津干潟(大分県)、八代海樋島(熊本県)のように干潟に生息している場所もある。		

サメハダホシムシ目サメハダホシムシ科		アンチラサメハダホシムシ	情報不足
		<i>Antillesoma antillarum</i> (Grübe & Oersted, 1858)	2001：－，環境省：－
選定理由	潮間帯から浅海に分布。砂泥ないしサンゴ砂中、あるいは、礫間の泥中に生息。1930年代には有明海の干潟で「クロムシ」と呼ばれて、釣り餌用に漁獲されたが、現在では、瀬戸内海や有明海を含め、ごく限られた生息地から少数が発見されるのみ。熱帯系種で、過去には奄美・沖縄から採集例があるが、近年発見されていない。体幹長 16 cm。		
分布情報	曾根干潟、沖端川		

サシバゴカイ目ゴカイ科		イトメ	情報不足
		<i>Tylorrhynchus osawai</i> (Izuka, 1903)	2001：－，環境省：－
選定理由	河川汽水域の高潮帯(ヨシ原など)の砂泥底に穴居する。汽水域に隣接する淡水域に出現することもあり、かつては沿岸部の稲作に被害をおよぼすほど多産したが、河口域における干潟の埋立や護岸工事などのため、激減した。体長 25 cm(生殖型バチの体長 6 cm)。		
分布情報	長井浜(行橋市)、曾根干潟、大牟田川		

サシバゴカイ目ゴカイ科		ウチワゴカイ	情報不足
<i>Nectoneanthes uchiwa</i> Sato, 2013		2001：－，環境省：－	
選定理由	瀬戸内海，有明海，八代海の泥質干潟に穴居する。有明海では，4～5月の大潮の夜間満潮時直後に生殖群泳が観察される。内湾の泥質干潟の埋立・環境悪化により激減している可能性が強い。体長 20 cm。		
分布情報	上り松川(築上町)，曾根干潟，沖端川，矢部川		

オフェリアゴカイ目オフェリアゴカイ科		ニッポンオフェリア	情報不足
<i>Travisia japonica</i> Fujiwara, 1933		2001：－，環境省：－	
選定理由	自然状態が良好に保たれている前浜タイプの干潟～潮下帯に生息。前浜干潟の埋立や環境悪化により，国内・県内の生息地は限られ，本種個体群は危険な状態にあると考えられる。体長 5 cm。		
分布情報	県内では長井浜(行橋市)。県外では福島県相馬市，和歌山県有田郡広川，秋穂湾(山口市)，本渡干潟(熊本県)，吹上浜(鹿児島県)などで記録されている。		

イトゴカイ目イトゴカイ科		シダレイトゴカイ	情報不足
<i>Notomastus latericeus</i> Sars, 1851		2001：－，環境省：－	
選定理由	砂泥質の干潟に生息する大型の種で，生存に安定した干潟環境を必要とするため，干潟の消失・悪化により，生息地が減少していると考えられる。体長 30 cm。		
分布情報	矢部川		

十脚目ベンケイガニ科		フジテガニ	情報不足
<i>Clistocoeloma villosum</i> (A. Milne-Edwards, 1869)		2001：－，環境省：－	
選定理由	暖流の影響の強い海岸に生息。生息が確認された場所は，いずれも潮上帯付近のゴミが溜まった場所であり，県内でも内湾や河口域の潮上帯の多くが消失している現状を考えると，本種も危機的状況にあると思われる。甲幅 17 mm。		
分布情報	県内の記録は，響灘のみ。県外では，大阪湾奥(大阪府)，和歌山県，徳島県，僧都川(愛媛県)，天草市牛深(熊本県)，奄美大島住用(鹿児島県)，大宜味村塩屋湾(沖縄県)など。		

十脚目モクスガニ科		タイワンヒライソモドキ	情報不足
<i>Ptychognathus ishii</i> Sakai, 1939		2001：準絶滅危惧，環境省：－	
選定理由	1988年に宗像市大島で発見されたが，現状は不明。絶滅した可能性もある。県内ではほかに，北九州市小倉北区と若松区で記録がある。淡水の影響が強い汽水域上流部の転石潮間帯中部付近を主な生息場所とするが，河川改修や河口堰建設などによる生息地の破壊のため，各地で個体群が衰退している。甲幅 11 mm。		
分布情報	県内での記録は，大島(1988年)，北九州市小倉北区と若松区。県外では，有田川(和歌山県)，北川(宮崎県)，万之瀬川(鹿児島県)などで記録がある。		

十脚目モクスガニ科		トリウミアカインソモドキ	情報不足
<i>Sestrostoma toriumii</i> (Takeda, 1974)		2001：－，環境省：－	
選定理由	砂泥質干潟に生息するアナジャコ科甲殻類，スナモグリ科甲殻類の巣穴内に共生するが，いずれの場所でも密度が低い。埋立などで宿主の甲殻類の生息地が破壊され，個体数は減少していると考えられる。甲幅 9 mm。		
分布情報	三池海水浴場(大牟田市)では比較的豊富。県内では他に，和白干潟，加布里干潟(糸島市)など。県外では，松島湾(宮城県)，緑川・本渡干潟(熊本県)，川平湾(沖縄県)など。		

十脚目モクズガニ科**ミナミアシハラガニ****情報不足***Pseudohelice subquadrata* (Dana, 1851)

2001：準絶滅危惧，環境省：－

選定理由

津屋崎で記録があるが、近年確認されていない。他に、響灘(北九州市)などでも記録がある。高潮帯に生息するため、コンクリート護岸化や河川改修などにより生息地が破壊されている。また、海岸林に対する松食い虫駆除剤等の散布も、個体数減少の直接の原因になっている。甲幅 20 mm。

分布情報

県内では、津屋崎、響灘。県外では、天草富岡(熊本県)、土々呂(宮崎県)に小個体群があるほか、小笠原や南西諸島では豊富。

十脚目カクレガニ科**ギボシメガニ****情報不足***Pinnixa balanoglossana* Sakai, 1934

2001：－，環境省：－

選定理由

砂質干潟に生息するミサキギボシムシ *Balanoglossus misakiensis* Kuwano, 1902 の巣穴に共生する。宿主特異性が高く、ミサキギボシムシ以外の生物の巣穴から得られた例はない。宿主個体群が水質汚染や埋立・浚渫等により激減している。県内では沖端川(柳川市)の泥質干潟で複数個体が採集されており情報不足とした。甲幅 10 mm。

分布情報

県内では、沖端川でのみ記録がある。県外でも希少で、近年の記録があるのは秋穂湾(山口県)、臼杵(大分県)、本渡干潟(熊本県)など少数。